

2012年3月

目次:

世界で活躍する G.ecbo卒業生	1-2
G.ecbo生の進路	3
2010年度インターン シップアンケート	4-5
2011年度夏期派遣 学生レポート	6-10
2011年度報告・総括	11
PPT研修チーム紹介	12

羽ばたけ、世界へ！！ 世界で活躍するG.ecbo卒業生達

谷本 修一(広島大学大学院国際協力研究科2011年3月卒業)

●株式会社日本工営 就職:2011年4月～

初めての海外渡航がこの海外インターンシップでした。それも途上国ということで非常に刺激的で、現地人の生活を生で感じられたのは貴重な体験でした。

私は現在、パキスタンの鉄道復旧に関する調査に従事しています。パキスタンでの体験はすべてが新鮮で、驚きの連続です。日本では考えられないような渋滞、クラクションの応酬、我先にと車線もなにもない道路…正直、とてもこんなところに日本の山手線のような近代鉄道が走るものとは思えませんでした。しかし、業務に従事するうちに、相手先や業務を実施するカウンターパート等、プロジェクトに係わる人達がみな、これが実現することを信じて走り続けています。



スケールが大きく、他社とのJV(ジョイントベンチャー)で行う案件が多いため、業務調整といっても、実際に業務を行うことは大変です。毎日上司や先輩に叱られる日々ですが、日々成長を実感することができます。

世界は意外と近いものです。それを是非、皆さんにも体験してもらいたいです。



2012年度G.ecbo
海外インターンシップ
募集を行います!!!

締切:2012年4月後半

世界へ!



G.ecbo海外インターンシッププログラムとは?

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適應できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

世界で活躍するG.ecbo卒業生達

長尾 浩介(広島大学大学院国際協力研究科2011年9月卒業)

- 在ナイジェリア日本国大使館 就職:2012年1月～
草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委嘱員

ナイジェリアに1月18日に赴任して早くも1ヶ月が過ぎました。草の根委嘱員としての主な業務は、ODAの一環として資金援助をローカルNGOに対し行っており、そのNGOを選定し、案件形成・実施に携わります。現場で仕事ができるということは非常にありがたいことだとナイジェリアに来て実感しています。国際協力とは何なのか、自分がやりたいことは何なのかということもよく考えながら、2年後を見据え、精一杯業務に取り組んでいきたいと思えます。



署名式－報道陣からの質問風景



アブジャ内－よく整備されています



晴れの日－ハマターン(季節風)が
運ぶ砂の影響で霞んでみえます

インターン経験を活かす！ For Future Carrier!



加藤 智威(広島大学大学院国際協力研究科2012年3月卒業予定)

- UNITAR(国連訓練調査研究所広島事務所) Internship :2011年10月～
- TA:能力開発特論(2011年度前期) Developing Designing Ability

After G.ecbo internship, fortunately I got a chance to work at the United Nations Institute for Training and Research (UNITAR) as an intern. This is my first experience of working at the international organization and everything new to me. I found out that my abilities hasn't reached the required levels for working at international organizations like United Nations and the necessity of a considerable effort after the internship. But I also found very nice to have a new challenge in a quite different area from my previous studies and/or experiences and a different perspective of a working day at an office. They had professionalism and always required quality. In some cases I had to amend some assignments over again and again. Through those activities, I had learnt the importance to strive to perfection and that was international organization's way and quality.

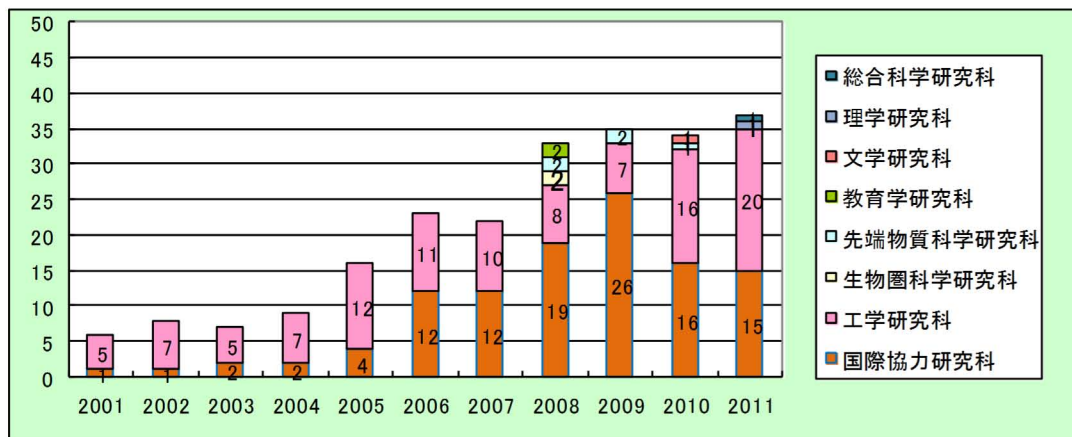
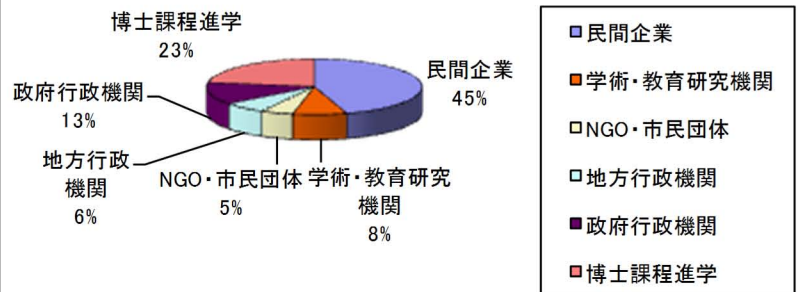
My responsibility was divided into two groups. One was the participation in Green Legacy Hiroshima (GLH) initiative and the other was UNITAR Hiroshima office operations. The main part of my task is updating the GLH webpage, making several kinds of documents and external affairs for Japanese counterparts. My first impression of UNITAR office was "fast" or "quick". The atmosphere in UNITAR was sometimes high pressure and overwhelming but it was very exciting for me because I understood that was the actual situation in international organization office. I think both the speed/quickness and correctness are required to work as a professional of international organization like UNITAR. I believe both experiences through G.ecbo and UNITAR will help me with building a firm foundation for my career and committing to devote to further studies and skills up.

プログラム成果：進路・就職状況

G.ecboプログラム修了生は卒業後、自分のキャリアを求めて様々な就職先進学先へ進路を進めています。(独)国際協力機構を始め、開発コンサルタントや地方行政機関そして一般民間企業へ就職しております。また博士課程後期課程への進学、研究機関への就職等それぞれの研究を深化探求するキャリアを選択する学生も多く見受けられ、多様化しています。

2010年度派遣生の多くが2012年3月に修了する予定です。震災のあとの厳しい就職活動を乗り越えての新たな飛翔を楽しみにしています。また、プログラム全学化へ向けて取り組んできた成果も少しずつ浸透してきているようで、2012年度はこれまで以上に多様な人材を育成するプログラムへと進化してまいります。

G.ecboプログラム終了後の進路先 (2005-2010年度派遣生)



インターンシップ関連の修士論文

本プログラム参加者のうち以下の8名が、インターンシップの成果のもとに修士論文をまとめました。

2011.9卒業	長尾 浩介	Returns to Education in Farm and Non-Farm Employment :A Case study of Timor-Leste
2011.9卒業	楊 光	SELF-DETERMINED MOTIVATION IN WORK A CASE STUDY OF A JAPANESE COMPANY IN CHINA
2012.3卒業	西俣 美奈子	紛争再発要因としての若者の雇用問題に関する一考察 —東ティモールにおける若者の雇用アクセスを妨げる3つの要因
2012.3卒業	樋口 洋平	平和構築活動の紛争配慮化における課題
2012.3卒業	KOYANGKO ANITA SERAH	FOREIGN AID IMPACTS ON RURAL PAPUA NEW GUINEA —Focusing on the Role of the Government
2012.3卒業	加藤 智威	ガーナにおける長期勤続中学校理科教員の特徴
2012.3卒業	末吉 亮介	国際教育協力プロジェクト終了後における自立発達性の研究について —インドネシアのREDIPを事例として
2012.3卒業	左右田 あみ	保険体育教育を通じたライフスキルの習得 —ブータンの小学生の事例から

2010年度 インターンシップアンケート報告

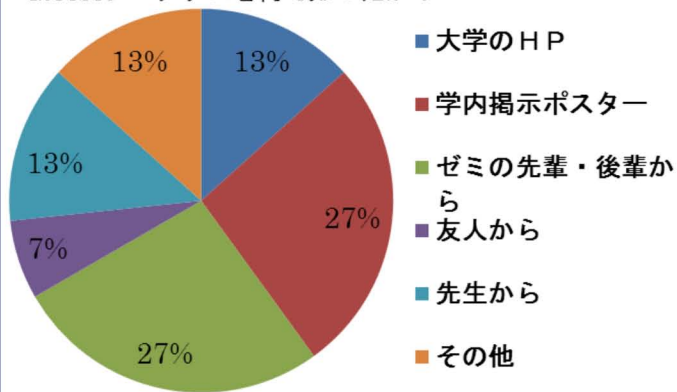
2010年度はG.ecbo海外インターンシッププログラムより夏期12名・冬期5名の計17名が派遣されました。帰国後に行ったアンケート結果によると、インターンシップでは受入先からの指示を待っているは何も与えられない、せっかくの機会を無駄にしないよう、自ら進んで好奇心を持つようにすることが必要である、と痛感した学生が多くみられました。



◆2010年度 学生派遣先

UNDP Timor-Leste, FORWARD, メコン大学, JICAセネガル,
 沖縄平和協力センター, パデコ, 西川ゴム, ICLEI, Sukma Bangsa,
 アルメック, UPNISMED, サタケ, マレーシア工科大学, ケニヤッタ大学

G.ecboプログラムを何で知ったか？



Q.研修・研究テーマが妥当でなかった場合、どのような工夫・改善が必要と思いますか？

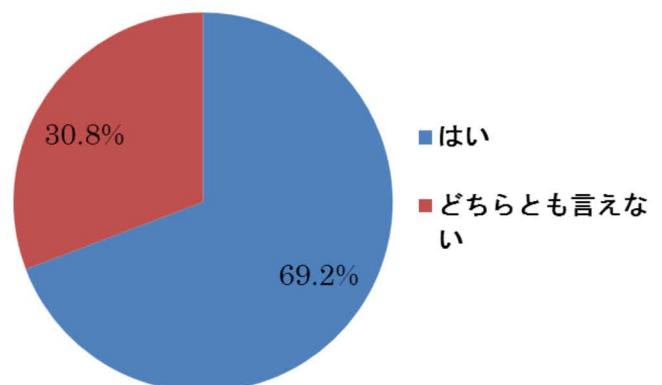
- * 可能な限りの事前情報収集と問題予測の上で、現地での柔軟な対応
- * 自分自身で何を行いたいのかを明確にしておくこと
- * 参加者自らがある程度の柔軟性をもって研修に臨むこと
- * たとえ実施可能なものでなくても、研修中はどんな機会に恵まれるかわからないので、新しい視点をもつことができるかもしれないという期待をもつ
- * 少し無理やりにでも、研修と研究テーマを関連させる部分をひとつでもつくっていったほうがよい



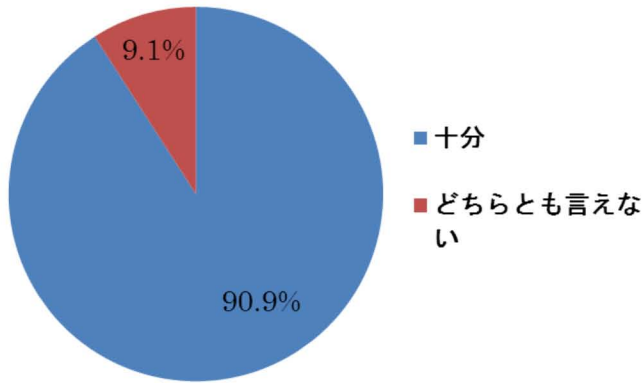
Q.本プログラム応募の一番の決め手は？

- * 渡航費や滞在費等の経済支援をしてもらえること
- * インターンシップと研究が同時にできることが魅力だった
- * 大学院で修士号の資格を取得するだけでなく、本プログラムに参加することで自分に付加価値を付けることができると思った
- * 国際協力分野でのキャリアを築いていくために有益であると考えたから
- * To expand my knowledge, experiences, skills, and establish relationships with counterparts on the international scene with teachers, educators, researchers and fellow students.
- * 開発途上国で業務に携わるにあたって、不可欠だと思われる問題解決能力を向上させ、初めて訪れる国での短期目標に則った業務や活動の進め方を学べることを期待したこと

研修・研究のテーマのマッチング



インターンシップ終了後のフォローアップ活動



Q.インターンシップ後、伸びたと思われる能力は？

- * 明るくなったと言われるようになった
- * 物事を堅実に考えることができるようになった。物事に対してその実現可能性・失敗のリスク・失敗した場合の損害など、以前よりも地に足のついた考え方ができるようになった
- * 英語のスピーキングが上達したといわれた
- * 文化・人種の違う人に自分を上手く表現し、伝える能力

Q.インターンシップ遂行上、活用できたと感じた能力は？

- * 職場の外にて行う、social activitiesや現地の人々の交流においては、自分の明るさと積極性を活かすことができ、多くの知人や現地人の友人をつくることができた
- * 現地語でのコミュニケーション能力。派遣前に現地語2種類(テトゥン語とインドネシア語)を週に2時間ずつ勉強して行ったことは、かなり役に立った

Q.インターンシップ遂行上、不足していると痛感した能力は？

- * 活動の優先順位や安全性を考え、時に参加を断る判断力
- * 人に自分の考えを論理的に説明する能力
- * パソコンを素早く使用する技術(エクセルで作成・outlookにて会議の参加者を予定に組み込んだりするなど)



Q.インターンシップ参加のメリット・デメリットは？ (メリット)

- * 授業で学んだだけでは、どこか現実味がない。しかし、現地でその実情を体験することは、発展途上国の問題について心の底から真剣に考えられるので良いと思う。問題意識を持つことができる
- * 大学院での研究だけでなく、実務を学ぶ経験を通して、将来の自分のロールモデルに出会う機会にもなる
- * It is very rare that we get an opportunity to do internship abroad with financial support and with much possible safety measures. I feel fortunate to have been selected from among the group of appliers. The good aspect of it was we get to choose from among the list of organizations so that the aims and objectives of such organizations is as relevant as possible to our research.
- * 実際の職場で働くことにより、どのような活動を通じて一つのプロジェクトが進められているのかを体験することができる
- * 研究テーマと研修内容が一致しているのならば、研修自体が研究にとって大きな助けになりうるし、研修を通じて現地でしか手に入らないような多くの情報を手にいれることができる

(デメリット)

- * 大学院のテスト期間と派遣先への提出書類の期限が重なるので、両立することが大変
- * 少なくとも日本よりは身の危険を感じる環境に晒されることになる
- * インターンシップ先でも自分の修論に関するデータが取れるようにしないと、夏場に2ヶ月間も行くと後々大変苦労する

2011年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

池田 真奈美 Manami IKEDA (理学研究科)

Host	ロシア科学アカデミー・ウラル支所 (ロシア)
Period	2011年8月8日－8月22日
Objectives	・カラバツシュ岩体におけるRodingitesの調査、選所鉱起因の鉱害の現状把握及び調査 ・金や鉛・亜鉛を主とする南ウラル地方における鉱床調査



今回のインターンシップで印象深かったのは、鉱害問題についてである。私は、今まで日本の鉱害(休廃止鉱山における抗排水問題)について研究してきたが、海外ではどのように対策や処理がなされているかということは、あまり詳しくは知らなかった。もちろん事前学習でカラバツシュにおける鉱害問題については学んだが、論文を読むだけでは全く想像ができず、またこの問題はかなり以前から問題視されているものであったため、現在は少し改善されているのではないかと考えていた。日本では、鉱害問題が問題視されて以降、その改善が厳しい環境基準のもと進められているので、ロシアでも同様に改善が進め

られているのではないかという思いがあったためである。しかしながら現状は全く想像と異なっていた。選鉱所などの工場からは、全く処理がなされておらず有害物質を含んだ煙が吐き出されていた。すでに選鉱を終えた不要な石を捨てるズリ場では、何の対策もなされていないため、石と反応し有害物質を含んだ雨水が、生活用水と混じって川に流されている様子などがいたるところで確認された。これらが改善されない理由としては、処理を誰が行い、誰がお金を払うのかという問題が大きく影響しているということだった。これは日本でも起こっている問題で、鉱害の処理というのは半永久的に続き、莫大なコストがかかってしまう。これらの問題解決には、やはり資金援助の制度を確立していくことや、厳しい環境基準を設けるなど、国の規模で対策を進めていかなければならないと強く感じた。また処理技術の開発も必要不可欠であり、技術面のサポートもかなり重要だと思う。自国だけの問題として考えるのではなく、技術提供などを通して世界規模で環境問題に取り組むということが重要なのだと、このインターンシップを通してとても強く感じた。

今回のインターンシップで学んだことや感じたことは、日本では決して体験できないことであり、異なる地域に行きその文化に触れることや、直面している問題の現状を自分の目でみるということはとても重要なのだと改めて思った。今回のこの経験を、就職後も存分に生かしていきたい、また海外に行く機会があったら活用していきたい。



植田 渉 Wataru UEDA (国際協力研究科)

Host	株)パデコ カンボジア理数教育改善プロジェクト『STEPSAM II』事務所(カンボジア)
Period	2011年8月8日－9月7日
Objectives	途上国において日本のODAで実施されている教育改善プロジェクトについて、実際の技術移転と、関係省庁との連携などを含むプロジェクト運営のノウハウとを、両面から学ぶ。

内戦の終結や国連による暫定統治などの記憶が新しく、ポストコンフリクトの国だというイメージが先行しがちだ。しかし既に治安は安定し、安い労働力を確保しやすい環境となっているため外資の工場立地も増えており、正に急激な経済成長の最中にある。日本に対するイメージは一般に良好である。国連カンボジア暫定統治機構の代表が日本人であったこと、平和維持活動へ日本も貢献したこと、現在に至るまで大規模なODAの提供が続いていること等が主な要因だと言われている。

事前準備についてだが、中学校・高等学校の授業で指導され得る内容の教材開発を一緒にするのが目的となるので、日本で使用されている理科の資料集や実験の指導書、市販の中高生向け理科実験参考書などを持参することを勧めたい。



2011年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

田中 健太 Kenta TANAKA (国際協力研究科)

Host	JICAマカッサルフィールドオフィス (インドネシア)
Period	2011年9月12日 - 10月13日
Objectives	<ul style="list-style-type: none"> ・国際協力とは何かを学ぶ ・途上国の交通問題に対する研究を行う



今回のインターンシップでは、ODAの現場を身をもって感じる事ができた。渡航前はJICAがODA事業を行っている地域では開発も進んでおらず、生活環境も日本よりはるかに遅れていることを想像していた。しかし、マカッサル市は州最大の都市ということもあり、まちは活気であふれ、大量の自動車やバイクが市内を走り回り、近代的な住宅もあり、人々の手には携帯電話、これ以上何を援助しているのだろうという疑問がわいてきた。おそらく旅行で短期間訪れただけならばそれで終わっていただろう。しかし、プロジェクト現場に身をおき、専門的な視点からのマカッサル市の問題点をたくさん聞いたこと、約1ヶ月間という長期間過ごし、現地の生活を感じ、たくさんの現地の人と触れ合えたことで少しではあるが疑問に対する答えが見えた気がする。一見開発が進み、これから継続的に発展していくかのように見えるまちでも、連続性のない用水路や高架道路、何年たっても工事の終わらない道路など、自助への支援という点で、社会の仕組みが順調に進む仕組みづくりとそれを実行できる人づくりという技術協力が必要なのだということが見えてきた。飲み水がない、食べる物が無いことに対する支援のように目に見えないが、援助国の自助への支援という意味ではこの



の社会の仕組みと人づくりが持続可能な発展への支援としてとても重要なことだと感じた。それでも、既存するものを否定して日本の技術を押し売りにするのではなく、この土地のことを理解・尊重しながら日本の技術を提案するように、現地の在り方に寄り添って手助けする姿勢が何よりも難しく大切だということを学んだ。そう感じた背景には、現地の人々と理解しあい、築いた信頼関係があるのだろうと思う。インターンシップを通じて、国際協力で大切なことは人と人とのつながりなのだということを学ぶことができた。

延川 裕樹 Yuki NOBEKAWA (国際協力研究科)

Host	Kenyatta University (ケニア)
Period	2011年8月24日 - 9月30日
Objectives	「研究テーマ:ケニアの初等教育において生徒の成績に影響を与える要因」についての情報収集・パイロット調査を実施する



インターンシップの目標は限られた範囲で達成することができた。9月初旬から始まった教員組合によるストライキによって9月中旬まで学校閉鎖という状況に陥った。さらに大学の図書館が新設され書物の移動等があり、資料に辿り着くことも難しい状況であった。そのため、実際の活動は限定されたものであったが、担当教員との議論等を行い、研究に関するアドバイスを頂いたり、帰国間際に小学校訪問を間に合わせる事ができたりという活動を通して、研究に関する知見等を高めることができたと思う。

私は今回のインターンシップで幸運にも光と影の両方を垣間見ることができた。大学が派遣機関であったことで、ケニアでは比較的富裕層の学生達と交流することができたし、ナイロビ市内では2名のストリートチルドレンと会話をする機会を得た。こうした経験から、ケニアの格差の現状を目で見て、肌で感じたために私は



大きな衝撃を覚えたのである。格差はどこにでもある問題ではあるが、その実態を見た時にどれ程に大きな問題であり、解決が急がれる問題であることを認識することができた。決して、自身の研究に直接影響のある内容ではないが、非常に有意義な気づきであるように私は考えている。私の研究分野は教育であるが、多くの要因が教育に影響を与えていることを疑う者はいないだろう。貧困という一面を体感できたことは将来的には自身の研究を行うに当たり、良い影響を与えると信じている。

2011年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

浅田 義教 Yoshinori ASADA (国際協力研究科)

Host	グラミン銀行グラミンシャクティ (バングラデシュ)
Period	2011年8月22日－9月23日
Objectives	太陽光発電に対する需要がある途上国と、太陽電池の生産国である日本が、国際協力という観点からどのように関わっていくことが望ましいか、考察する



グラミンシャクティは、非常に自由な環境で活動をさせてくれ、スケジュールについても柔軟にこちらの要望に応じてくれた。具体的なスケジュールについては、まず担当者に面会した後、派遣期間中にどんな活動をするのかレポートの提出を求められる。それを元にスタッフと協議をし、必要に応じて実際の活動現場の見学をアレンジしてくれたり、研究に必要な情報を提供してくれたり、など非常に協力的であった。最後に滞在中の総仕上げとして、当初のレポートで触れた目的を達成できたか、何を発見したかなどについてプレゼンテーションを行い(あるいはレポートの提出)、プログラム修了となる。注意点として、先方から与えられる課題は、始めのレポート及び最終報告のプレゼン(またはレポート)のみであったため、それ以外の活動については、全て自分で、計画を提案し、手配を依頼し、結果報告しなければならなかった。インターン期間中に自身がどんな活動をするかについて、はっきりと計画を立てておかなければ、非常に実りの薄いインターンになる可能性があると感じた。また、先方からほとんど課題を与えられない分、自分が派遣先にできる事について考えさせられた。具体的には、派遣先からいただいた情報をまとめ、また他の機関から入手した情報と重ね合わせることで(もちろん先方には情報利用の了解を取った上で)、今後の経営戦略を考える上で有益な情報をこちらからも提供できるように心がけた。以上のような活動を通して、コミュニケーションが特に重要だと感じた。自分のやりたいこと、すべきこと、得たこと、これらを伝えて、さらに相手からの意見を聞いて、議論する力はもちろんのこと、何気ない雑談を楽しくすることが、全ての活動をスムーズに行うために、また活動を前向きに楽しんで行うために重要だと感じた。



以上のような活動を通して、コミュニケーションが特に重要だと感じた。自分のやりたいこと、すべきこと、得たこと、これらを伝えて、さらに相手からの意見を聞いて、議論する力はもちろんのこと、何気ない雑談を楽しくすることが、全ての活動をスムーズに行うために、また活動を前向きに楽しんで行うために重要だと感じた。

Le Van THO (国際協力研究科)

Host	West Java Environmental Management Agency (インドネシア)
Period	2011年9月12日－10月7日
Objectives	<ul style="list-style-type: none"> ・To experience the existing transportation issues of Bandung city ・To propose some ideas about how to reduce carbon emission from transportation in Bandung City ・To develop my personal and practical skills and explore International Cooperation Studies

The Host Institute which I had internship is Bandung city located in central of West Java Province. With its rapid growth and extremely high population density, the demand of mobility in Bandung city has been stimulating. In addition, the number of private vehicle owner is very high and its speed is increasing dramatically. As a results, Bandung city is facing some thorny problems in term of traffic congestion, safety and pollution.

During the time in the host institution, I participated in some activities, such as the seminar "Audit energy in building", "Tunza International Children and Youth Conference on the Environment" which brought together more than 1400 delegates from over 120 countries. The Host Institution has a clear idea for the G.ecbo program that is the only internship. Therefore, I have been asked to participate in their daily activities, but also do one assignment within time frame.



2011年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

板谷 憲志 Satoshi ITADANI (国際協力研究科)

Host	UNICEF Timor-Leste (東ティモール)
Period	2011年8月15日－10月14日
Objectives	・To understand the role and the mechanism of the Timor-Leste Youth Parliament (TLYP) and how much education system grows



国際協力を研究する、また国際協力に関心がある中で、紛争後国という現地に行けた経験は非常に有意義なものとなった。それは一つ目に、未開発な状況を見られたからである。今まで、教科書や論文などの文面上や体験談で、紛争後国の未整備な様子を想像してきた。しかし、本プログラムにおいて、自分の目でその様子を把握できたので、この経験は今後の研究において有意義なものになると思われる。そして二つ目に、開発援助を行う機関として代表的な国連機関の仕事に関わることができたからである。このような貴重な経験は簡単に得られるものではない。国連機関とはどのような仕事をするのか、仕事場の雰囲気、国連の役割など、内部から経験出来たことは私の人生経験において、非常にかけがえのないものとなった。三つ目に、紛争後国において活動する様々な援助機関の方たちと出会えたことも貴重な経験となった。私は人生を通して、国際協力や開発援助に携わりたいと考えていたので、本プログラムの過程で、様々な援助機関の方たちの生の声を聞かせていただいた。そして、将来取り組みたいことをより明確にすることが出来た。



国際協力を研究する、また国際協力に関心がある中で、紛争後国という現地に行けた経験は非常に有意義なものとなった。それは一つ目に、未開発な状況を見られたからである。今まで、教科書や論文などの文面上や体験談で、紛争後国の未整備な様子を想像してきた。しかし、本プログラムにおいて、自分の目でその様子を把握できたので、この経験は今後の研究において有意義なものになると思われる。そして二つ目に、開発援助を行う機関として代表的な国連機関の仕事に関わることができたからである。このような貴重な経験は簡単に得られるものではない。国連機関とはどのような仕事をするのか、仕事場の雰囲気、国連の役割など、内部から経験出来たことは私の人生経験において、非常にかけがえのないものとなった。三つ目に、紛争後国において活動する様々な援助機関の方たちと出会えたことも貴重な経験となった。私は人生を通して、国際協力や開発援助に携わりたいと考えていたので、本プログラムの過程で、様々な援助機関の方たちの生の声を聞かせていただいた。そして、将来取り組みたいことをより明確にすることが出来た。



G.ecboインターンシップを終了後、JICAインターンシップへ参加しました！

UNICEFとJICAのインターンシップにそれぞれ2ヶ月程参加しました。異なる援助機関で、国際協力が行われている現場や業務を知り、国際協力を考える上で貴重な経験ができました。インターンシップでは、実際に現場で働いている方と話すこともできるので、非常にいい機会だと思います。

Anita Koyangko Serah (国際協力研究科)

Host	CNAS-HiPeC (Tribhuvan University) Kathmandu Nepal (ネパール)
Period	2011年7月24日－8月21日
Objectives	To improve my research skills, get experience and get in contact with the JICA office in Nepal and do research on some of their projects in Nepal in which I did.



My internship might be a little unusual to previous ones but I learnt a lot. It was hard on me and also the host institution because my research was not connected to their activities (well not directly) but I went out of my way to make sure I learned something before I came back. And the host institution provided advice for me on my research methods and skills which were really helpful. It would have been better if I had gone to a host institution that has connection with my research. That was the mistake I made. But still I don't regret going to CNAS-HiPeC because I learnt so much there. Things to improve for me personally which I realized from the internship would be self confidence, improve my computer skills and for planning and sticking to schedule.

2011年度夏期派遣学生 帰国レポート/Internship Report from interns

大矢 祥平 Shohei OHYA (国際協力研究科)

Host	株式会社 アルメック (ベトナム ハノイ)
Period	2011年8月22日 - 9月22日
Objectives	I) 開発コンサルタントの仕事や現地での生活を体感し、進路選択時の材料とする II) 海外において現地のスタッフと協力して設定した課題を遂行する III) 異文化理解を深め異文化での生活に順応する

私はこの研修に臨むにあたって上記3つの目標を掲げた。研修を終えて、I)については1ヶ月の滞在中で、派遣先の社員の方やプロジェクトに関わる方から様々な体験談や考えを得ると同時に深く考える機会が多くあった。また、実際のオフィスに滞在したことで、開発コンサルタントの仕事の様子を知ることができた。私はベトナム語が出来ないため、調査票作成時には友人であるベトナム人留学生、調査実施時には現地の大学に協力を依頼した。調査実施時には、現地までスタッフに同行し、彼らのモチベーションに配慮することを意識した。調査時には想定外のことも発生したが、予定していたサンプル数を得ることができた。しかし、SP調査では、調査票設計に問題があり、回答結果が偏ってしまう問題が発生してしまった。以上のように、II)についてはスタッフとも良好な関係を維持しつつ調査を実施できたが、調査票自体に問題があった。また、時間マネジメントの意識が欠如しており、分析に費やす時間を十分に確保することができなかった。タイムスケジュールをしっかりと立てて行動するべきだった。



III)については、特に食事の面では達成できたとは言い難い結果となった。日本食レストランや世界チェーンのファーストフード店を利用することが多かった。異国での生活の難しさを改めて感じた。一方で、休日を利用して積極的に現地を歩いて回ったり、ハノイ以外の都市に赴いたりすることで、ベトナムの文化や歴史を吸収することに励むことができた。



2011年度冬期 追加派遣学生決定

今年度冬期派遣学生の追加募集を行い、新たに2名の追加派遣学生が決定しました。

(國光 薫/総合科学研究科、今野 香織/国際協力研究科)

2011年度派遣実績を3名に加え、合わせて5名が冬期に派遣されます。

【2011年度 冬期G.ecbo プログラム派遣学生】

- 國光 薫(総合科学研究科・グラミン銀行)
- 今野 香織(国際協力研究科・グラミン銀行)
- 全 麗清(国際協力研究科・グラミンシャクティ)
- 和栗 佳代(国際協力研究科・グラミンシッカ)
- 檜木 陽子(国際協力研究科・ケニヤッタ大学)



総合科学研究科:1名、理学研究科:1名、工学研究科:20名、国際協力研究科:15名
計:37名

2011年度活動報告



4月1日	2011年度派遣学生の公募開始
4月5日	G.ecbo Day: プログラム募集説明会開催
4月11日-14日	G.ecbo Week: 学生プラザ内にて開催
5月6日-9日	2011年度派遣選考面接
5月16日-17日	2010年度冬期派遣学生帰国報告会
5月20日	英語プレゼンテーション研修ガイダンス
5月28日	能力開発特論: アフリカルチャーゲーム
5月31日-6月3日	第1回英語プレゼンテーション研修
6月21日-6月24日	第2回英語プレゼンテーション研修
6月28日	リスク管理セミナー開催(全学対象)
7月7日	リスク管理セミナースペシャルセッション
7月19日-7月22日	第3回英語プレゼンテーション研修
7月29日	能力開発特論: オープンディベート
8月2日	遡上教育インターンシップ面接



プログラム説明会



オープンディベート



9月5日	G.ecboプログラム運営委員会開催
10月5日	2011年度G.ecbo追加派遣募集ガイダンス
10月26日	2011年度追加派遣選考面接
11月7日,9日,24日	2011年度夏期派遣学生帰国報告会
11月14日,16日,18日	冬期派遣第1回英語プレゼンテーション研修
12月14日,16日	第2回英語プレゼンテーション研修
12月19日	リスク管理セミナー開催(全学対象)
1月17日,27日	第3回英語プレゼンテーション研修
3月2日	G.ecboプログラム運営委員会開催



2011年度G.ecboプログラムの総括

昨年度は派遣学生の数名が健康を損なうという事態に見舞われ、今年度は特に危機管理体制を重点的に見直した一年でした。

大学内でも色々な海外派遣プログラムが出来た関係でG.ecboプログラムから国際センターに移管された形の危機管理セミナーの参加人数は増加の一途を辿っていますが、G.ecbo候補生の緊張感はというと参加人数に反比例して減少しているのかも知れないという危惧がありました。そこで今年度は、G.ecbo独自に前年度派遣者と今年度候補生による危機管理懇談会(リスク管理セミナースペシャルセッション: 写真右上)を実施しました。実際にトラブルや病気に見舞われた経験のある当事者の話を聞くことによって、候補生の気が引き締まることを期待したからです。幸い夏期派遣者は全員無事に帰国しましたが、今日現在で冬期派遣者にスリ被害の報告がありました。危害を加えられたわけではなく、被害も致命的でなかったことが救いではあるが、事件発生の実事は大変残念なことで危機管理の難しさをあらためて痛感しました。G.ecboプログラムの運営自体にもまだまだ解決しなければならない問題が山積しており、とりあえず一つ一つを丁寧に処理した先に結果があると信じて、めげずに実施していくつもりです。

宜しくご支援お願いします。

グローバルインターンシッププログラム運営委員長 肥後 靖

G.ecbo海外インターンシッププログラム TAの紹介

/Introducing G.ecbo Internship Program TA Team

2011年度後期

《PPT Presentation》

Assistant Prof. Andrey Kalguin

Coodinator for PPT Presentation sessions

Doris Toe Hooi Chyee (マレーシア出身)

国際協力研究科博士課程後期学生

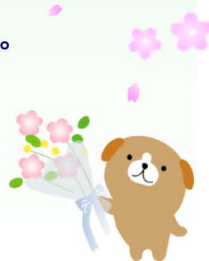
Ahmed Sajjad (パキスタン出身)

国際協力研究科修士課程後期学生

みなさんありがとうございました。

Dorisさん&Sajjadさんは、

引き続きよろしくお願ひします。



2012年度前期予定

《PPT Presentation》

Doris Toe Hooi Chyee (マレーシア出身)

国際協力研究科博士課程後期学生



Ahmed Sajjad (パキスタン出身)

国際協力研究科修士課程前期学生



《Developing Designing Ability》

Shohei Ohya(大矢祥平)

国際協力研究科修士課程前期学生



来年度、よろしくお願ひします。

事務局編集後記

活動予定 2012年度前期

<4月-10月>

G.ecbo Day(4月4日:予定)

派遣学生募集締め切り(4月23日)

選考・面接(5月上旬)

2011年度冬期派遣学生帰国報告会

(5月中旬-下旬)

派遣学生決定者向けガイダンス

(5月中旬)

事前研修開始(6月)

リスク管理セミナー(6月下旬)

インターンシップ派遣(8-10月)

派遣先教員訪問

ニューズレターvol.5 no.1発行予定

本年度より、G.ecbo事務局では派遣時のバックアップ体制を強化するため連絡チャンネルの多様化を進めています。

インターンシップ創世期より利用しているグループメール、緊急携帯電話の設置に加え、FacebookなどのSNSを立ち上げました。様々な連絡ツールを持つことで、リスク管理面においてますます力を入れていきたいと思ひます。

Facebookに関してはまだまだ試用段階ですが、徐々にG.ecboメンバー、G.ecbo卒業生の参加を進めていく予定ですので、卒業生の皆様よろしくお願ひします。



10年後の自分を探そう
世界と出会うインターンシップ



Explore your future through Global Internship.
Join the G.ecbo program!!

Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo

広島大学 平和・国際室

G.ecboプログラム事務局(学生プラザ3F)

電話 082(424)4551, 4581, 6950

Email: iecbo@hiroshima-u.ac.jp

ホームページもぜひご覧下さい。

<http://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo/index.html>

